

## NHK取材「真珠湾の記憶」とメディア

地歴公民科 (校長) 西牟田哲哉

2021年12月8日、真珠湾攻撃から80年になる節目に、NHK番組の取材を受けた。戦争体験者が減り、戦争を知らない世代、いやそれどころか、聞き及んだことさえない世代が教える時代である。高校ではどんな歴史教育が考えられるか？私は、世代の異なる者たちが戦争の記憶を自分の問題として受け継ぎ引き継いでいくことの大切さを強調したかった。その意図、実践の内容、結果を本稿で示した。全国ネットのメディアを通じて歴史教育や戦争について考える貴重な体験をした。そのため本稿では、歴史教育におけるメディアの役割や意義・課題についても、論じてみた。

<キーワード> 真珠湾攻撃 井上成美 海軍兵学校 メディア 日米戦争 ヒロシマ

### 1. はじめに—歴史教育とメディア

過日、NHK番組の取材を受けた。2021年12月8日、真珠湾攻撃から80年になる節目に、全国の高校ではどんな取組を工夫しているか？それが取材の主旨だった。私は高大連携歴史教育研究会という全国組織の副会長をやっており、その関係で推薦があったようである。NHKから問い合わせがあったから、実際の放映まで1週間に満たない制限された時間だったが、全国ネットのメディアを通して歴史教育や戦争について考える、またとない貴重な体験をした。本稿ではこの時の体験を基に、特に歴史教育におけるメディアの役割や意義・課題について、論じてみる(注1)。

### 2. 高校生に望む学びの姿—定期試験直後や大学入試直前という制約を越えて

今回の突然の取材依頼は本校の定期試験直前にあった。授業が可能なのは1週間後の12月7日(火)の午後に限られた。期末直後の3年理系クラス。大学入試・共通テストを1か月後に控えている。撮影チャンスは答案返却後の25分くらいしかない。翌日はもう真珠湾特集番組を放映する12月8日だ。理系世界史担当の小田原教諭が期末後に、戦争についてのテーマ史を組んでおり、その出だしに私がゲスト登場する設定を考えた。まさに“苦肉の策”であった。

まじめで勉強熱心な高校生でも、試験が終われば一夜にしてほとんどのことを忘れてしまう。まして、戦争の記憶は風化の一途をたどっている。祖父母も含め戦地・現地での戦争体験など、身近では非常に少ないであろう。なんとか、受験勉強や定期テストを越え、自ら学び続ける姿は実現できないものだろうか？戦争を風化させず、「未来」の主役である子どもたちが、自ら「学ばなければ」と実感として思うような授業をしなければならぬ。NHK取材に対し、私が望んだのはそんな生徒や教員の姿だった。今回の私の課題は「本当の学びのきっかけ」をどうつくるかにあったといえよう。方法として私(正確には、「私」や協力者の本校小田原教諭及びNHK取材班)が目指したのは、世代の異なる者たちが、戦争の記憶を自ら本気のものとして捉え、どう受け継ぎ引き継いでいくか、という点にあった。なぜなら、授業実践の一線からすでに退いている校長が、自分だけで完結する授業をしても、それでは自己満足に過ぎず、「未来」に向けてはあまり効力はないからだ。

### 3. 世代間の壁と戦争の授業—素朴な質問と世代間の断絶

私が初任教师だった頃、「日本が一番長く戦った国は？」という問いかけがよくなされた。「アメリカではありませんよ。中国です」こう自問自答して、満州事変からの戦争の授業を始めることが多かった。(注2)だが、近年の中堅社会科教師の悩みは少し異なる。「えっ！先生。日本って、アメリカと戦争したの？」昨今の高校生の素朴すぎる疑問に直面し、嘆く。さらには「原爆落としたのって、北朝鮮でしょう？」こんな高校生もいると聞く。さて、どうしたらいいのだろうか？若い教師たちは悩んでいる。

戦争体験者が減り続け、教室内外見渡せば誰も戦争を体験していない。その中で、戦争を知らない、いやそれどころか、聞き及んだことすらない世代が戦争を教える時代となっている。学校で一番年長者である校長の私でも、戦争が終わって18年も経って生まれているのだ。

私は、かつて海軍兵学校卒の父親から聞いた伝聞の体験談を使って、第二次世界大戦の実践をしたことがある(注3)がしかし、その伝聞も、父亡き後、私の頭の中で錆びついて、今ではもうかすかに残された記憶となっている。記憶そのものがやがて自然消滅し、消え失せていくのだろう。真珠湾80年とはそんな時代なのである。

### 4. 中堅教員の授業に「ゲスト」登場する校長—「ひとつと」を越えられるか

私は次のような話から始めた。

「海軍兵学校は広島にある。広島の中心部から南に約20キロメートル。瀬戸内海に浮かぶ江田島という島。20キロ離れていても原爆の影響はあった。1945年8月6日8時15分。ピカッ！という稲光。一瞬、間(ま)があり、ビリビリ、ビリビリと音を立て、すべてのガラスが割れていく。当時19歳で軍人の学校の最上級生であった父は、下級生に指示する立場にあり、「ふせろ！」と声。それから時間がたって、広島市内の悲惨な状況が伝わってくる。救護のため船で広島市内へ。そこで救護活動をしたらしい。が、なぜか口ごもる父。「お前には、言ってもわからない」と一言。原爆の目標がもう少し南であったら……。父の命も19歳までで瞬時に消えてなくなり、当然私はこの世に生まれていない。皆さんとこうして戦争について一緒に考える授業をすることもなかった。私にとってヒロシマは「ひとつと」ではない……」

生徒たちは真剣なまなざしを寄せてくれた。映像に映し出された表情を見ると、こちらの気持ちが通じているように感じた。

### 5. 世代間を越えた共通理解とコンセプト—「歴史の証言」と真実

上のシーンの中で「口ごもる父」の部分に、小田原は引きこまれたという。彼と話しながら気づいたのであるが、同じ父でも、息子に話したいことと話したくないことがあったに違いない。そのことを私は今回初めて意識した。「歴史の証言」といっても、すべてが真実とは限らないのだ。そこをかぎ分ける態度こそ、私たちがめざす「未来の社会」をつくる上で、一番大切なコンセプトではないか。この点、2人は共鳴した。撮影日当日私の話は、次のように展開した。父が海軍兵学校に入学したとき、「新任の校長」として着任したのが、井上成美(しげよし)であった。最初のあいさつで「日本はアメリカとの戦争に負ける」と断言したそうである。「諸君は負けた後荒廃した日本を立て直すため、この海軍兵学校でしっかり勉強してもらいたい」という訓示であった。父は仰天した。お国のために戦地で死ぬ覚悟だったからである。(下線部は映像で流れた部分)

井上成美は、もともと海軍中枢部の中心のメンバーであった。有名な山本五十六のブレインである。山本五十六は、真珠湾攻撃の立案及び実行の司令長官である。どういふことか？「歴史の真実」は単純ではない。ドラマで描くような“一筋縄”ではいかないのだ。「歴史とはこちらから学ばなければ、何も教えてくれない」歴史小説家・半藤一利の言葉だ。(注4)

ここを深く考えさせるのが、私の話の“肝”であった。ポイントとなる部分には、上記にあるように自分の原稿にわざわざ強調点まで打って、撮影当日も渾身の思いでここを力説した。だが、この部分は、なぜか放映では見事にカットされた。放映されたのは、下線部のみである。非常に残念であった。わずか1・2秒足らずの差なのに、なぜわざわざここをカットするのか、と思った。

映像には全くでなかったが、井上成美校長の教育方針も紹介した。敵性言語として英語を廃止する時代に、生徒全員に英英辞典を持たせる。ぎゅうぎゅう詰めの軍事訓練を減らし、自由時間を増やす。大量の読書や暗記中心の勉強をする前に、「自分の頭で考える」ことを重視。数学や国語、哲学。実学よりも教養科目を重視した。戦時中としては、革新的な教育ともいえる。(注5)

リーダーとしての在り方や学びの目的を考える上で、今から見ても参考になる。意義を感じ、約10分の短い話の中にあえて入れた。ところが、これらの場面も、先の強調点と同様ほとんどすべて実際の映像ではカットされていた。「ヒロシマ」の話もカット。今振り返ってみると、歴史教育とメディアの役割を考察する上で、これはなかなか貴重な体験だったのではなかろうか。このことについて7章で再度触れてみる。

## 6. 授業づくりの難しさと授業者の責務—「受け継がれる」授業の条件

授業づくりで難しいのは、こちらが学ばせたい部分と、相手が知りたい部分・学びたい部分の間に、せめぎあいがある場合であろう。私は父の言葉すなわち「ドイツとの同盟が致命傷だった。これさえなければ、真珠湾もヒロシマもなかった・・・」という言葉、その無念そうな表情を強調して後半の話をした。おそらくそれは、日独伊三国同盟を命がけで反対した井上成美の悔しさでもあったことであろう。私が最終的に学ばせたい部分はここにある。

だが、中堅教師・小田原は少し角度が異なっていた。彼は対象生徒が理科系の進学希望である点を考慮し、科学者達の戦争に対する立ち位置に注目させる教材を、私の話の後配布した。アインシュタインやラッセルが出した宣言の資料である。それを熱心に読み始める生徒たちの真剣な表情を映し出し、映像は終わった。

授業をつくっていく主体は、教師であり、責任もそこに存する。当然、複数の教材(「ゲストによる証言」も含めて)をどう構成するか、責任者の教師が決めるべきである。そして子どもたちがどう内容を受けとったかを確認し、次の授業につなげていく責務が授業者には求められる。私の方はどうか。もちろん授業者の一部としての責務を果たすと共に、この授業に参加した生徒、テレビだけ見た生徒、両方ともに見ていない生徒のいずれにもフォローや補足をする配慮が、管理職として求められると考える。特に実際の授業と、多くをカットし切り貼りした短い映像では、与える印象が異なる場合が多く、留意は不可欠である。また、「こうした授業の工夫がこれからは必要」とカメラの前でしゃべった以上、それを一部だけで終わらせるのは不十分と考える。フォローを終業式での全校生徒への話の中で、なんとか実現させようと今準備を始めている。

## 7. 歴史教育とメディア—どう切り取られるか？どう伝わるか？

私にとっては、「ヒロシマ」の話と「日独伊三国同盟」の話は、強く結びついている。父親によれば、

井上成美の「三国同盟反対」が実現していたら、「真珠湾もヒロシマ」もなかったからである。その悔恨が、井上→父親→私へと、「心の相続」(注6)がされて、今回の授業化の構想に至っている。だから、両者は分かちがたい。カットは考えられない。

一方、取材班は立場が異なる。今回の取材の主旨はそこにはない。取材班は「真珠湾の記憶」を今の高校生に伝えるため、なぜ、わざわざ最年長者の校長が授業に「ゲスト」として登場する必要があるのか?その場面と理由が、映像として欲しいわけである。他の話は「極力分かりやすく」しなければ、視聴者が瞬時に理解できない。主旨にはずれる内容は「すべて枝葉」であり、カットされなければならないのである。こうしたことに今回私は全く無防備であった。

余談になるが、映像が流れた翌日、見知らぬ方から電話があった。「校長先生とお話がしたい」と言う。「映像を見て、この学校は戦争について詳しく取り組んでいる学校だと期待した」と言う。この方は「当時の天皇の戦争責任を最近の学校はあまり扱っていない。その是非を問う」と、約1時間電話口でほぼ一方的にお話になった。いずれも私が今回全く扱っていない内容であった。

映像は、切り取られ方で、受け取る側の解釈や印象が大きく変わってくる。今回はこちらの主張をぼかした形の映像となったので、その分拡大解釈がされやすかったのであろう。目の前の“出演”準備にてんてこまいで、こうしたメディアの特徴・効果や限界を私たちは全く考えていなかった。歴史教育とメディアという問題では、多くの課題を残してしまったと言わざるをえない。

今回の取組は、副産物としてはからずも「歴史教育とメディア」という、周知の話題について、改めて考えさせられた。メディア特にテレビニュースが流れるのは多くの場合、数秒の瞬時である。映像と音声にテロップが加わる場合が多い。今回もそうだった。受け手が瞬時に「あるストーリー」を解釈可能なように、加工をするのであろう。被写体や話者の意図とずれが生じるのは、映像メディアの世界ではむしろ必然なのかもしれない。それに気づかずにいた私たちの方が稚拙であったのである。歴史教育としては、日々そうした環境の中にいるのが、「大衆化社会」(注7)の日常であることを、どう自覚させるか。これが大切である。本稿を通してそれに気づいたのが、せめてもの救いである。その意味では、格好の材料を読者に提供できたと考えている。以上で、本稿の締めくくりとしたい。

#### <注>

注1 NHKニュース番組「シブ5時」で、2021年12月8日(水)午後4時59分から約5分ほど全国ネットで放映された。本校の映像は2分程度。タイトルは「真珠湾攻撃から80年「戦争」を新しい手法で伝える」

注2 本校研究紀要第27号の拙稿「世界史の中の「日中戦争と三国同盟」—1938年段階における歴史当事者の政策議論の教材化—」2000年参照

注3 前々任校の愛知県立豊橋南高校にて。この実践については拙稿「新科目「歴史総合」と“心の相続”のある授業—日独伊三国同盟の議論教材の扱いをめぐって—」(愛知県世界史教育研究会編『世界史教育研究』第4号2018年)参照

注4 『太平洋戦争への道 1931—1941』NHK出版p6参照。半藤氏は著書『昭和史』で引用の言葉を残し、2021年1月に逝去した。

注5 徳川宗英『江田島海軍兵学校』角川新書2015年p40~61参照

注6 (注3)の拙稿を参照

注7 「大衆化社会」については、本誌の別の拙稿「「歴史総合」に求められる探究力のあり方—「大衆化の時代」に焦点を当てて—」を参照されたい。